

保育とワークシェアによる女性医学研究者支援

(実施期間：平成 18～20 年度)

実施機関：東京女子医科大学（代表者：宮崎 俊一）

課題の概要

東京女子医科大学は女性医師の育成を理念として設立され 100 年余の歴史を持つ。しかし、女性医師が子育てのために医学を断念することは多い。さらに医学研究に携わる医学部卒業生は減少傾向にある。この背景のもとに、子育てをしつつ医学研究を遂行する女性医師の育成は本学の使命である。子育てをしている女性医学研究者を対象とした本課題の実施と実施期間終了後の継続によって、指導的立場となる優れた女性医学研究者の育成を行い、医学部、病院における育児支援と女性医師支援のモデルを育成する。

(1) 総合評価（所期の計画と同等の取組が行われている）

医学系女性研究者を育成する大学としての特徴を活かした学内病児保育施設の設置など、医学系女性研究者のニーズに基づき、研究者育成支援の環境整備の施策を実施していることは評価できる。特に、女性研究者の育児と研究を両立させるために、ワークシェアリング及びフレックス制度の導入を試み、フレックス制度の方が有効な施策であることを明確にしたことが評価できる。「男女共同参画局」の設置により、今後、実効性のある組織的な取組を継続して行うことを期待する。

<総合評価：B>

(2) 個別評価

①目標達成度

保育支援強化、2 人一組のワークシェアリング及びフレックス制度導入など当初計画に取り組み、試行実績に基づく制度の PDCA サイクル（評価・見直し）を実施している。また、都市部において保育ニーズが高い病児保育、学童保育にも積極的に取り組んでいることも評価できる。

②取組の成果

病児保育、フレックス勤務制度など、出産・育児等と研究活動を両立し継続できる仕組を構築している。特に病児保育室の利用者が増加しており、その利用が定着しつつあることは、評価できる。このような取組の効果として、講師の女性在籍者比率の増加や、女性の医学部長の選出などの成果や変革への機運が見られる。しかしながら、准教授以上職階の女性研究者比率においては、未だ大きな変化がないため、今後、優れた女性研究者を登用する取組を一層推進することを期待する。

③取組の妥当性・効率性

保育とフレックス制度を組み合わせた支援策は効果的で、支援を受けた女性研究者の学会発表数の増加等顕著な効果が見られる。病児保育室の利用者が多く、現場ニーズへの対応や、周知活動の結果として高く評価できる。メンター制度も確立しており、今後は利用者増を図るなど有効活用を期待する。

④波及効果

学内病児保育施設設置は、女子医科大学の取組としてではなく、医学部を有する大学にとっての先駆的なモデルとして評価できる。今後も実施期間中と同様に、積極的に情報公開を行うことで社会的認知度を高めるなど、波及効果を期待する。

⑤実施体制の妥当性

学長自ら率先して、研究者だけでなく医師スタッフ全般の支援を総合的に行う体制を樹立したことは評価できる。事業を実施した女性医学研究者支援室だけでなく、女性医師再教育センター、女性医師生涯研鑽委員会の女性支援プロジェクトを統合した男女共同参画推進局にて、包括的な推進を期待する。

⑥実施期間終了後における取組の継続性・発展性

男女共同参画推進局を中心として、引き続き予算を確保して、研究者に限らず医師・研究者を一体化した施策の継続が期待できる。特に、女性医師再教育センターなど、医師不足への対応として発展的に展開されることを期待する。

(3) 評価結果

総合評価	目標達成度	取組の成果	取組の妥当性・効率性	波及効果	実施体制の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
B	b	b	a	b	b	b